

■■■■■ SOMNEED ■■■■■
ローカル・イニシアチブを通じた保護、促進、再生

急増する人口によって膨張する需要が砂漠化と土壌侵食などの不毛地帯をつくり出している昨今、アンドラプラデシュ州スリカラム県では静かな革命が起こっています。そこでは、小規模流域を共有する7集落において、自然保護と持続的な地域開発が推進されています。

ポガダヴァリ村(アンドラプラデシュ州北部)で農業を営むバライヤさんはずっと失業状態でした。雨不足で村での農業活動は厳しいものでした。生活のため、バライヤさんは数年前、建設労働者としてハイデラバードに出稼ぎに出ました。2009年に農作業のために村に戻ってきましたが、その後は町へ出稼ぎに行く必要がなくなりました。村で実施されている小規模流域管理プログラムに参加するようになったからです。

「今はもうハイデラバードに行く必要がない。(インド政府による)農山村部雇用創出スキームとソムニードの小規模流域プロジェクトがあるから、村での生活が成り立つよ」と笑顔で話すバライヤさんに、仲間が畑に来て作業するよう促しました。ポガダヴァリでは雨季が始まったので、農家はみんな大忙しです。

バライヤさんのように、今では多くの村の若者が、都市へ出稼ぎに出なくてもよいと感じています。

大いなる繁栄のための小規模流域

アンドラプラデシュ州スリカラム県の3つの流域は、自然資源の喪失と農業破綻の危機に取り組むには理想的な地形を有しています。

ソムニードは、2007年から国際協力機構(JICA)とのパートナーシップの下、草の根技術協力事業(JICA Partnership Programmes)として、この地域で参加型手法を用いた住民主導による小規模流域管理を実施してきました。

JICA 草の根技術協力事業では、7集落183世帯から成る3流域の住民を対象としています。



写真:ゴディヤパドゥ村における堰水建設(写真:ソムニード提供)

ソムニードでは、プロジェクトの開始から実施までの全ての段階で村人に関わってもらいます。「村人は尊重され、村人の持つ知識と技術は活用される」と語るのはソムニードのスタッフの M.ラマラジュさんです。

「パートナーシップ構築、コミュニティの課題分析、行動計画の策定、実施とモニタリング、評価とフィードバック」を実践するソムニードは、パタパトナムの研修センターで村人への集中トレーニングに力を入

れています。この集中トレーニングは村人の自立を促すためのものです。ラマラジュさんは言います——「村人は、既にあるものに意識を向け、計画し、利用可能な資源をいかに活用するかを学ぶのです。」

ゴディヤパドゥの部族集落は、流域管理が行われている7集落のうちの一つですが、年長者たちが昔はあったのに今は成育しなくなったと嘆いている植物についての情報収集を開始しました。この衝撃の事実気づいたおかげで、村人は次世代のために今ある植物を保全していく決定をしました。

人々はトレーニングの際、地域の植物相をカテゴリー分けしてまとめていきました。1年をかけて、100種を収録した植物図鑑として完成させました。

植林の際、村人はソムニードの支援を得て土壌浸食の度合いをチェックし、農業用の雨水を確保し、土壌肥沃度を向上させる12種類の活動を設計しました。流域管理活動について質問したところ、ガンガイヤさんは黒板をつかってその構造と立地について説明してくれました。

目に見える結果を予想する

ゴディヤパドゥ村とポガダヴァリの両村は、収穫の増加を見込んでいます。

「以前は、十分な水が得られないという理由で、貯水池より低い位置では耕作が不可能でした。今ではそこも利用できますから、今年は収穫があがると期待しています。」

土壌侵食や大量の雨水の流れを調整する石堤の建設など、水と灌漑設備の整備は、ゴディヤパドゥ村の人々が耕地を拡大し、混合農業を行うのを可能にしました。村人は平地では稲、ひまわり、ゴマを栽培し、斜面にはカシューナッツ、マンゴー、ウコンを植えます。

村人は市場で売るためのほうきの穂の栽培もしています。

「以前は、私たちは、1本のほうきを作るのに2本の低木を使用して、1年あたり約1万本のほうきを製造していました。しかし今年は、土壌の質が向上したため、1本のほうきを作るのに必要だったのは低木1本で済みました。今年は、ほうき15000本を見込めます。」村のある農家(Uhika Jujarua)は、収量の増加について尋ねられるとこう答えました。

プラットフォームの必要性

村での仕事が増えるに従って、人々は成果を出すためには管理組織の存在が必要だと気づきました。そこで2つの村の人々は、2010年4月、5月にそれぞれ、グラマ・チャイタニヤ・サンガム(ポガダヴァリ村)、マリヤマタ・チャイタニヤ・サンガム(ゴディヤパドゥ村)を設置しました。



写真: 会計係のガウランマさん(ゴディヤパドゥ村のマリヤマタ・チャイタニヤ・サンガム)(写真:OWSA 提供)

それらコミュニティベースの組織(CBOs)は、各家庭から男性と女性をメンバーとして1人ずつ選出して、民主的に運営されます。CBOs には、ソムニードの支援でつくった定款類があり、2年ごとに入れ替わる会長、書記長、会計係がいます。

マリヤマタ・チャイタニヤ・サンガムでは、井戸の管理を村人で責任分担しています。ガンガイヤさんは過去4か月の水位記録を見せてくれました。10年でゴディヤパドゥ村が自立できるよう、村人は CBO の活動に参加します。

グラマ・チャイタニヤ・サンガムでも、15人の運営委員には達成目標があります。出稼ぎを減らし、子どもが教育を受け、村の共有財産を保護し、各家庭が丈夫な家を建てることです。

CBO の定款で最も注目に値するのは女性の参加に関するものです。両村では、女性の巻き込みを保証する CBO の定款の条項に従って、女性が組織運営に積極的に関わります。

「CBOs ができた後に、村人たちが自分自身で、組織を運営するための規則が必要だと感じたのです。ですから、村人は自分たちで決まりをつくりました。ソムニードが女性を含めるようにいったわけではありませんが、彼ら自身で、女性の参加は組織をうまく立ち上げ維持するのに不可欠だと気づいたのです。」—M.ラマラジュさんはこう述べます。

新しい幕開け

プロジェクトと CBOsの持続性に関して質問を受けたガンガイヤさんは、「ソムニードは2年以上も我々をトレーニングしてくれました。森林と流域管理のための建造物のメンテナンスは我々の責任です。我々は他者に依存することはありません。しかしながら、組織は立ち上がったばかりなので、今はまだソムニードの助けが必要です。(完全に自立するまでには)もう少し時間がかかるでしょう。」と答えました。

過去3年間に M.ラマラジュさんが実感した変化について、彼はこう言います。「村人は、勇気を持って話すようになりました。村人に自信もついてきました。最も顕著なことは、リーダーシップをとろうとする若者が増えていることです。」

小規模流域プロジェクトは終了間近ですが、このスキームに参加した7集落の人々の将来は新しい希望の幕開けとなります。村人たちは、彼らが取り組んできたことの結果をまだ目にしていませんが、小規模流域管理プログラムは、彼らの自立を促しました。グラマ・チャイタニヤ・サンガムの書記を務める J.パドマさんは、ゴディヤパドゥ村から収穫した一握りの種を見せながらこう言いました——「私たちは水や他の資源をいかに確保するかということを学びましたが、今後はそれらを一生涯守っていく必要があります。」



写真:ゴディヤパドゥ村で取れた種をみせるポガダヴァリ村のグラマ・チャイタニヤ・サンガム書記を務める J.パドマさん(写真:OWSA 提供)

ソムニード代表の和田信明さん曰く、「この小規模流域プロジェクトは、ソムニードの20年間の探求を実現させたものです」。